

## 在沖縄海兵隊による発がん性物質を含む汚染水の一方的な放出に抗議します

在沖縄海兵隊は、8月26日、沖縄県や宜野湾市の反対を無視して、発がん性物質として知られる有機フッ素化合物を含む汚染水を下水道に放出しました。県民の生活や生態系に甚大な影響を及ぼす可能性があるにもかかわらず、7月に行われたサンプリング調査結果すら待たずに一方的な放出が行われたことは、沖縄県民を侮蔑する暴挙というほかありません。

マサチューセッツ工科大学のエドワード・ローレンツ博士は、沖縄の施政権が返還された1972年、「ブラジルの1匹の蝶の羽ばたきは、テキサスで竜巻を引き起こすか？」という講演を行い、ある場所における環境のわずかなゆらぎが別な場所で大きな災害を引き起こす可能性を指摘しました（バタフライ効果）。今回の汚染水の放出が、どれほどの被害をもたらすのか、私たちには予測不可能です。また、ニューヨークの生態学者バリー・コモナーは「生態学的なネットワークは一つの増幅器であって、一つの場所で小さな攪乱が起こったとき、それが遠く離れたところで、大きな影響を引き起こすことがある」（『何か環境の危機を招いたか』邦訳、1972年）と警告しました。私たちは、これらの米国学者たちが指摘するとおり、駐沖海兵隊による今回の汚染水の放出が、米軍が世界各地でまき散らしている人権侵害や環境破壊と相俟って、遠からず、地球規模において、悲惨極まりない破局を招来するのではないかと怖れます。

今回の汚染水の無断放出は、単なる健康・環境被害にとどまらない、大きな憤りを引き起こしつつあることを知ってください。かつて、米軍を中心とする連合軍は、太平洋戦争末期、沖縄の地形が変わるほどの艦砲射撃を行い、最終的に県民の4分の1にあたる9万4千人といわれる民間人の死を招きました。また、27年間に及ぶアメリカの施政権下で沖縄の人々が味わった恐怖や屈辱も、筆舌に尽くせないものでした。「銃剣とブルドーザー」による土地の強奪をはじめ、米軍人・軍属による殺人や強姦、加害者野放しの事故などのおぞましい犯罪が絶えない一方、平和を望む沖縄の地を、朝鮮戦争やベトナム戦争をはじめとする米軍の軍事行動の兵站基地に作りあげました。1972年の施政権返還以降も、凶悪犯罪が絶えることなく、沖縄を要塞化するための新たな基地の建設とそれに伴う取り返しのつかない環境破壊、昼夜を問わない訓練による騒音、戦闘機の墜落や部品の落下、昨今では駐沖縄米軍関係者における新型コロナウイルス感染のクラスター化など、沖縄に生きる人々の憤怒はもはや限界に達しています。米軍の駐留が平和をもたらさないどころか、むしろ現地に混乱をもたらし軍事産業を利するのみであることは、アフガニスタンで現実化している恐るべき破局からも明白です。

かつてペリー提督に同行し、『琉球本島における医学地誌および農業に関する報告書』（1856年）を書いた海軍軍医ダニエル・S・グリーンは、「琉球の気候は、冬の寒さや夏の暑さも厳しくなく、おそらく世界の何処よりも快適であり、そして、完全にとまでは言わないまでも、この島は、海に浮かぶ島の島よりも、健全である」と敬意をもって記しました。私たちは、駐沖縄米軍が一刻も早く立ち去ることによって、グリーン博士が感嘆した美しい平和な沖縄を取り戻すための貢献をして下さることを心から願ってやみません。それが、米国が国際社会の中で他国と共存し、平和に存在するための唯一の道であることを私たちは確信しています。

2021年8月30日

日本キリスト教会大会靖国神社問題特別委員会委員長 小塩海平